

アメリカ映画における女性の台詞

黒岩 裕

キーワード：映画，女性，英語，会話，アメリカ

1 はじめに

この小論では、アメリカ映画に登場する女性の台詞の特徴について分析と考察を試みたい。具体的には、アメリカを舞台とする映画の中から、女性と男性の二人の主要登場人物の会話のシーンを一つまたは二つ取り上げて、女性の台詞の内容、構成、流れを分析し、女性の台詞の傾向や特徴と思われる事柄について考察する。今回の研究では、アクション映画やSFXなど視覚的な要素を前面に出した映画は除外し、登場人物の会話が映画の重要な要素となっていると考えられるものを対象として取り上げた。会話が重要な役割を果たしているアメリカ映画は無数にあるが、ここでは、今回の研究のために購入した映画の中から五本の作品を選択し、それらを分析と考察の対象とした。

今回の研究の前提として、次の四つのことを指摘しておきたい。一つは、アメリカ映画における女性の台詞の特徴として考察されたものが、必ずしも女性だけのものとはいきれない点である。ここで女性の台詞の特徴として考えられた事柄が、別の映画、別の場面では、男性の台詞の中に認められる可能性もある。つまりここで紹介する女性の台詞の特徴とは、女性の会話の中にしか観察されないものではなく、男性の会話よりも女性の会話の中により多く認められる傾向があるものということになる。二つめは、ここで分析するものは、男女の会話における女性の台詞であり、女性同士の会話における女性の台詞ではないということである。男女の会話の場合と女性同士の会話の場合とでは、女性の台詞について異なる傾向があることは十分考えられる。三つめは、ここで紹介する女性的な特徴は、全ての女性の登場人物に当てはまるものではないということである。映画の中の台詞については、当然ながら、性別による差だけでなく、個人差も存在する。アメリカ映画には様々なタイプの女性が登場し、彼女たちの会話の内容や構成は多種多様である。四つめは、ここで紹介する女性の台詞に関する傾向や特徴は、限られたサンプルから推察された仮説であるということである。より多くのアメリカ映画についてデータを収集すれば、ここで紹介する女性の台詞についての仮説に反する事実が出てくることも考えられる。

最後に、映画の中での女性の会話の特徴は、現実の女性の会話の特徴とは必ずしも一致しないということも付け加えておきたい。映画の中の女性の台詞は、脚本家、監督、女優などの映画制作者が作り出した架空の創造物であって、現実の女性の会話とは必ずしも同一のものではない。映画の台詞の中には、実際の会話の中で聞くことがほとんどない非現実的なものが含ま

れていることもある。しかしながら、多くの場合、映画の中の会話は現実の会話を反映したものであり、映画の中での女性の会話の特徴は、現実の女性の会話の特徴と幾つかの共通点を持つものと考えられる。その意味で、今回の分析が、現実の女性の会話を分析する際に、何らかの参考になればと願っている。

今回の分析には、上に述べたようないくつかの限界が考えられるが、アメリカ映画における女性の台詞を鑑賞する新たな視点を提供できれば幸いである。

2 「ゴースト」より

「ゴースト」は、友人の陰謀で強盗に射殺されたサムが、死後もこの世に残り、死後の世界の住人と交信する能力を持つ黒人女性の協力を得ながら、恋人モーリーを危害から守るという話である。次の会話は、モーリーとサムが、同棲を始めたアパートの寝室で交わしたものである。

Molly : Are you OK?

Sam : Mmm-hmm, I'm fine.

Molly : What's the matter?

Sam : Nothing.

Molly : Are you worried about the promotion?

Sam : No, not really.

Molly : Then what? Is it moving in together?

Sam : No. I don't know. It's a lot of things. I just don't want the bubble to burst.

It seems like, um, whenever anything good in my life happens,

I'm just afraid I'm gonna lose it.

Molly : I love you. I really love you.

Sam : Ditto.

このシーンは、モーリーの“Are you OK?”という問いかけの台詞で始まる。それに対し、サムは気のない返事をする。そこで、モーリーは“What's the matter?”というよく使われる普通の質問を繰り返す。二番目の問いかけにも、サムは“Nothing”という一語だけの短い返事しかない。納得できないモーリーは、さらに三番目の質問をする。この質問は、前の二つより具体的なもので、昇進のことを気にしているのかを問いつけるものとなっている。これに対しても、短い御座りな返事が返ってきたため、モーリーは同棲したことを気にしているのかと、四番目の問いかけをする。モーリーの質問がようやく核心に触れたため、サムは自分の心中を語り始める。それを聞いたモーリーは“I love you. I really love you.”と答え、このシーンで初めて質問以外の台詞を言うことになる。

このシーンでまず気付くことは、モーリーが、会話を開始する手段として、問いかけの疑問文を用いているということである。さらに、とぎれそうになる会話を継続させながら、納得の

いく返事を引き出す手段として、質問をその後さらに三回繰り返しているという点も興味深い。最初の二つの質問が、形式的な漠然とした内容のものである一方、最後の二つの質問は、具体的な事柄を挙げて相手の確認を求めるものとなっている。つまり、モーリーは、質問を繰り返す過程で、会話の焦点を絞っていることになる。このやり方で、モーリーは、御座なりで形式的なものでない、中身のある会話を形成することに成功する。しかもその会話の中身が思いがけず、サムの自分に対する深い思いを感じさせるものであったため、“I love you. I really love you.”という台詞につながることとなった。

一方ここでのサムの会話については、気のない返事というパターンが繰り返し使われている。“Mmm-hmm, I'm fine.” “Nothing.” “No, not really.” というように、サムの最初の三つの台詞はいずれも、自分の本心を語らない気のない返事となっている。

このシーンの直前に、モーリーとサムが同棲を始めるアパートに引っ越してくるシーンがある。サムが持ってきたソファはモーリーの趣味に合わない。そこで、モーリーは次のようにサムに話しかける。

Molly : Sam, what's this chair doing here?

Sam : What do you mean? I love that chair.

Molly : I know you love this chair but we've discussed this and...

Sam : Yeah, I've had it forever. I mean, when I watch TV, I'd sit in it.

Molly : This chair is ugly.

Sam : So?

Molly : And it doesn't go with anything.

Sam : It goes with me.

Molly : You are right. It does. We'll paint it.

ここでもモーリーは、会話をスタートさせる手段として問いかけを用いている。ただし、この問いかけは、モーリーの意見を婉曲に表し、サムにある行為を促すスピーチ・アクトの台詞ともなっている。“What's this chair doing here?” (この椅子はここでなにをしているの?) という台詞は、「私はこの椅子をこのアパートで使いたくない。処分してほしい。」というモーリーの気持ちを表している。サムから自分の期待していた行為や発言を引き出せなかったため、後の会話の中で、モーリーは直接的な表現で自分の意見を主張している。“This chair is ugly.” (この椅子は醜い) や “And it doesn't go with anything.” (この椅子は全くこの場に合わない) という台詞は “What's this chair doing here?” を直接的に表現したものである。それでも、意見を変えないサムに対して、モーリーは椅子を塗りかえるという代替案を提示してこの会話を終えている。

この一連の会話のなかで、モーリーが用いている会話のパターンは、最初疑問文の形で間接的に自分の意見を表し、同時に相手にある行為を促す。それが、思い通りに運ばない場合は、肯定文の形の直接的な表現で自分の意見を言い直す。それでも相手が意見を変えない場合は、両者がある程度納得できる妥協案を提示するというものである。

3 「ミセス・ダウト」より

この映画は、離婚の結果週に一回しか三人の子供に会えなくなってしまったダニエルが、女装して家政婦になりすまし、子供たちに会いに行くというストーリーである。以下の会話は、ダニエルが長男の誕生日に派手なパーティーを開き、近所の女性の苦情で仕事場から駆け付けた妻ミランダと口論となり、離婚のきっかけとなったシーンである。

Daniel : Oh, that's great. She called you, and you bust the birthday party. That's great.

Miranda : Don't you dare make me out to be the monster here, Daniel! Don't you dare! You have all the fun, and I get whatever's leftover.

Daniel : Oh, you chose the career, Miss...

Miranda : I have no choices here, Daniel! I have no choices. Even when I try to do something fun, you have to do it ten times bigger. I bring home a birthday cake and a few gifts. You bring home the goddamn San Diego zoo, and I have to clean up after you.

Daniel : Oh, I'm sorry, but it's not toxic waste, just a few party plates, huh?

Miranda : Why am I the only one that feels there has to be rules?

Daniel : Oh, please.

Miranda : Why do you always make me out to be the heavy?

Daniel : I don't make you out to be anything. You do it yourself. Quite naturally, Miranda.

Miranda : You set me up, Daniel, every time.

この口論のシーンはまず、ミランダが誕生日のパーティーをぶち壊しにした(bust)ことを非難するダニエルの台詞から始まる。それに対するミランダの反論の台詞はかなり激しい口調であるにもかかわらず、疑問文の形を取っている。疑問文の形で相手を非難する台詞は、ここで引用したシーンの中で、“Why am I the only one ...?” “Why do you always make me out...?”と、これ以外にも二回使われている。映画の中の会話で、女性は相手を非難する際しばしば疑問文の形を使うのではないかということが推察される。

このシーンのミランダの台詞についてももう一つ気が付くことは、ミランダがダニエルを非難する時に、私はこれこれ、一方あなたはこれこれと、自分と相手を対比する言い方を三回も使っている点である。“Why am I the only...?”を含めると四回このような言い方を使っていることになる。一方ダニエルはこの口論の中で、そのような言い方は一度も用いていない。ミランダと自分との違いについては無頓着な様子である。ミランダが自分の方が大変な思いをしていると感じているため、このような言い方となったものと考えられるが、相手と自分を対比する言い方は、映画の中の口論のシーンで女性がしばしば使うものとも言えるかも知れない。

このシーンで、ミランダがダニエルの名前を三回呼んでいる一方、ダニエルはミランダの名

前を一回しか呼んでいないことも男性と女性の台詞の違いの一つと考えられる。さらに、ダニエルがミランダに呼び掛ける際、“Miss”という言葉を使っている点も興味深い。女性は男性に呼び掛ける際、主に名前を使うが、男性は女性に呼び掛ける際、名前以外の様々な呼び方を使う傾向があると考えられる。

4 「ワーキング・ガール」より

この映画は、秘書であったテスが、努力と幸運の結果取引先の社長に認められ、秘書と個室を持つ身分にまで出世するというアメリカ的なサクセス・ストーリーである。以下のシーンはビジネス・パートナーとしてある大きな取引にかかわったテスとジャックが、お互いに引かれ合うようになる頃のものである。

Tess : How did you get this scar?

Jack : Some guy pulled a knife in Detroit.

Tess : Really?

Jack : No. No. I was nineteen and I thought it would be cool to have a pierced ear.

My girlfriend stuck the needle through and I heard this pop and fainted and hit my chin on the toilet.

Tess : Have you been telling that story ever since?

Jack : You're the only one who knows the true story.

Tess : Except the girlfriend.

Jack : I had her, uh...disappear. It's too bad. Nice girl. Real shame.

Tess : Jack?

Jack : Hmm?

Tess : There's something that I have to tell you.

ここでも女性のテスがまず質問で会話をスタートさせている。この会話のもう一つの特徴は、ジャックが話し手、テスが聞き役になっている点にある。テスの質問に促されてジャックは自分の昔のことを語り、テスは所々で質問をしながらその話を聞く役割を演じている。男性が話し手、女性は聞き手というアメリカ映画の男女の会話のパターンの一例と考えられる。女性が話し手で、男性が所々質問をしながらその話を聞くという場面も考えられるが、この映画の中でジャックとテスがそのような会話を交わすシーンは一つもない。会話におけるこのような男女の役割分担は、この映画では特に顕著に表れているが、他のアメリカ映画についても、同様の役割分担の傾向があるものと考えられる。

この会話の最後の部分でテスは、“Jack.”と呼び掛けてから、“There's something that I have to tell you.”という台詞で会話のトピックを変えることを試みている。テスは自分の話を始めるきっかけとして、“Jack.”と相手の名前を呼んでいるが、ジャックが自分の話を始めるきっかけとしてテスの名前を呼ぶケースはこの映画の中で一度もない。女性が、男女の会話

の中で、自分の話を切り出すきっかけとして相手の名前を呼び掛けるシーンはここで紹介した他の映画の中にも数多く登場するが、逆のケースは比較的少ない。

5 「白と黒のナイフ」より

この映画は刑事事件から身を引いた元検事の敏腕女性弁護士テディが、妻殺しの容疑をかけられたジャックの弁護を担当し彼の無罪を証明するが、最後に意外な事実を発見するというサスペンスである。テディは、ジャックが全てを正直に告白すること、彼女が彼の無罪を確信できなくなった時点で担当を降りる、という条件で弁護を引き受ける。裁判が進むにつれて、二人の仲は被告と弁護人の関係を越えるようになる。以下のシーンは、ジャックの元愛人エイバリーが証人として法廷に現れ、テディがその事実を初めて知ることとなった後の二人の会話の後半部分である。

Teddy : If you'd told me about Avery, I wouldn't have taken the case.

Jack : I had an affair with somebody, that doesn't mean I killed my wife.

Teddy, I...I couldn't tell you... I couldn't tell you in the beginning
because that's why, because you wouldn't have taken the case.

Later on, I...

Teddy : What?

Jack : Well, I...I couldn't because then...uh...you wouldn't have thought we
were real.

Teddy : You lied to me.

Jack : I had to lie to you. Don't you understand? I...I had to lie to you.

Teddy, that stuff about Page. I didn't know anything about it.

Teddy : I didn't want to be used anymore. I gave all this up because I just...
I wanted to clean myself off. I'm dropping the case.

Jack : You can't! It's my life! It's my life! You can't! I didn't kill her.

Teddy : I don't believe you.

この会話は、ジャックが、裁判の形勢にも大きく影響してくるにもかかわらず、元の愛人の存在をテディに隠していたことを非難するものとなっている。映像を見ると、テディがこの出来事で動揺していることがわかるが、彼女の台詞の多くは、結論だけを述べる簡潔なものとなっている。ここで引用したテディの五回の台詞は、四番目のものを除いて、ワン・センテンスで終わっている。四番目の台詞にもジャックに対して投げ掛けられた一文ー“I'm dropping the case.”（私はこの事件を降りる）ーがあるが、その前の部分はテディが自分の過去を回想する過去形の文章となっている。テディが、ジャックとの会話を半ば拒絶しながら、同時に自分自身の意識とも対話をしていることがわかる。アメリカ映画の男女の口論のシーンで、男女が激しい非難の言葉をやり取りすることはよくあるが、ここではそれとは別の会話のパターンが

使われている。つまり、男性に対して不信感を抱いている女性が男性の言葉にほとんど注意を払わず、“You lied to me.” “I don’t believe you.”といった短い拒絶の言葉で答えるというものである。

6 「クレイマー、クレイマー」より

「クレイマー、クレイマー」は1979年度のアカデミー賞を受賞した作品で、「タイム」が8ページに渡る特集記事を組むほどの反響を呼んだ名作である。結婚生活の中で自分自身を失ったと感じて一人で家を出たジョアンナは、別れた夫テッドと、七歳の一人息子ビリーの養育権を争うが、父と子が新しい関係を築いていることに気が付いた彼女は、裁判で勝訴したにもかかわらずビリーの養育権をテッドに譲ることにする。以下の会話は、ビリーを引き取りにきたジョアンナが子供を自分のもとに連れて行くことをあきらめるラスト・シーンからのものである。

Joanna : Ted, it's Joanna. I'm downstairs in the lobby. Will you come down here and meet me alone?

Ted : Hi, what's up? Tell me, what? What's the matter?

Joanna : I woke up this morning. I kept thinking about Billy and... I was thinking about him waking up in his room and...with his little clouds over him that I painted, and I thought I should have painted clouds downtown because...and then he would think that he was waking up at home. I came here to take my son home. And I realized he already is home. Oh, I love him very much. I'm not going to take him with me. Can I go up and...talk to him?

Ted : Yeah. Listen, why don't you go upstairs and see him? I'll wait here.

Joanna : How do I look?

Ted : Terrific.

ジョアンナの最初の台詞はインターホンごしのもので口調もしっかりとしているが、二番目の長い台詞は、活字にするとわからないが、涙をこらえながらのもので、とぎれとぎれに話されている。そのため、この部分のジョアンナの台詞の中には、完結せずに、途中でとぎれている文がいくつか含まれている。“I kept thinking about Billy and...” “I should have painted clouds downtown because...”などの文は、結末がない不完全な形で終わっている。このシーンのジョアンナの台詞に関してさらに気が付くことは、接続詞andを多用している点である。ジョアンナの二番目の台詞の部分だけで、andは六回も使われている。特に、最初の四つのandはジョアンナが込み上げる感情を抑えながらどうにか話を続けようとしていることを感じさせる。さらにもう一つ注意を引く点は、言い直しの台詞があることである。“I kept thinking about Billy and...”という台詞が、その直後に“I was thinking about him waking up in his room and...”と言い直されている。これは、同じことを単に別の表現で言い表すのではなく、言い直しながらより詳しく、より具体的に自分の言いたいことを説明するものと

なっている。

映画には泣きながら女性が話すシーンがたびたび登場するが、以上の三点は、そのようなシーンにおける女性の台詞の特徴として解釈することができるかも知れない。勿論、男性が感情的になるシーンでは、男性の台詞にも同じような傾向を認めることができるかも知れない。

ここでの男女の台詞を比較すると、呼び掛け方にも違いを認めることができる。ジョアンナは、テッドの名前を呼び掛けの言葉として使っているが、テッドは“Hi”と“Listen”を呼び掛けの言葉として使っている。呼び掛けの言葉における男女の違いについてはすでにふれた通りである。

この映画の一番最後の二人の台詞はジョアンナの母親としての気遣いとテッドの思いやりを感じさせる。“How do I look?”は、しっかりとした姿で息子に会いたいという母親の気持ちを感じさせる台詞であり、それに答える“Terrific”という台詞からは男性のいたわりが伝わってくる。名作の幕切れを飾るのにふさわしい台詞と言えるのではないだろうか。

7 おわりに

ここで紹介したアメリカ映画の男女の会話における女性の台詞の傾向や特徴は、限られた数の映画を分析した結果得られた仮説の段階のものであるが、それらの仮説のうち、以下の二つについては今後さらに検討を続けていきたいと考えている。一つは、アメリカ映画の中で、女性は男性よりも、疑問文を使う傾向が高いのではないかということである。会話のきっかけとして、相手を非難する言い方として、あるいは、自分の意見を伝えたり相手にある行為を促す手段として、疑問文の形をしばしば使うのではないかということである。もう一つは、男女が会話の中で相手に呼び掛ける際に使う言葉についてである。女性が男性の名前を主に使う一方、男性は女性の名前だけでなく、それ以外の様々な言葉を使う傾向があるように考えられる。これら二点については、今後より多くのアメリカ映画を分析し、仮説の適否を確認していきたい。さらに、アメリカ映画の台詞の研究を、英語教授法や、実際の男女の話し言葉の研究に応用する可能性も、今後の研究課題としたい。

参考資料

- 英会話クラブ「ゴースト ニューヨークの幻」(スクリーンプレイ出版株式会社)
- スクリーンプレイ「ゴースト ニューヨークの幻」(スクリーンプレイ出版株式会社)
- スクリーンプレイ「ミセス・ダウト」(スクリーンプレイ出版株式会社)
- スクリーンプレイ「ワーキング・ガール」(スクリーンプレイ出版株式会社)
- CINEX「白と黒のナイフ」(ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント)
- CINEX「クレイマー、クレイマー」(ソニー・ピクチャーズ・エンタテインメント)